



ひげのスコープ!

Scope of beard

QR



筆者は、まだひげをたくわえ始める前、昭和56(1981)年、大学での授業や会議の後の夕刻、縁あるよう向きで、東京は渋谷のNHK放送センターにいた。NHK学校放送「理科教室中学校3年生」への出演である。これはその1本からの音声QR。共演者は、当時、某テレビ局の「必殺〇〇〇」にご出演の若手の俳優さん。

番組の表題は「運動とエネルギー」。そのねらいは、「放送教育」のそれ、そのもの。身の周りの事象から課題を見つけ、事象が現れる環境と複数の実験条件の中で、主体的に広い視野で深く考え、

論理的で整合性ある思考で自己と他者そして自然との対話を総合し、課題を解決すること。

番組のおおよその構成は、こうである。

まずは導入部分。軽やかなテーマ音楽にのって、神奈川県にある遊園地のロングショット。画面の中央左側に、今ではありふれた感ある絶叫マシンの一つ「宙返りコースター」。これが、ゆっくりと画面中央にクローズアップする。そして、同じく、長いロープにつながれ大きく回転するブランコへのズームイン。ここに、番組のタイトルと出演者名がオーバーラップする。

引き続いて、カメラは、スーッと、スタジオの出演者のツーショットへ。共演者と筆者の間で番組の趣旨の対話。そう、縦にも横にも回転する「宙返りコースター」では、乗客がレールの上で逆さになっていても落下しないこと、円筒形で横に回転する「ローター」内の床に置かれたコップの水がこぼれ落ちないこと、ローターの中の床が下にずれても、中の方は、壁にへばり張り付いて下に落ちないこと、などなど。ハラハラ、ドキドキの連続。

「好奇心を刺激したい」の一心の構成。数々の

迫力ある興味深い映像は、共演者と視聴者に、幼いころ、あるいは、つい先ごろ、という視聴者も想定しつつ、そうした実体験を思い出させる演出。結果として、「映像に語らせる」という意図のもと、共演者と視聴者に「遠心力」を強く意識付ける。

こうしたシーンを経て、本稿冒頭の音声に関わる実験装置が登場。円盤があり、その上に火のついたローソクを1本固定する。円盤を回転させても炎が風の影響で消えないよう、ローソクは円筒形プラスチックで囲われている。

ここで、かの問いかけ。結果は、何と、クローズアップされる炎が内側に。

事実は、経験と信念に裏打ちされた予想とは、ま逆のどんでん返し!

番組は、事実を目の当たりに驚きと困惑の中、小学校の学習内容「燃焼」や浮きと重りの実験を行い、エネルギーの交換と保存の話題で、エンディングへ。

学校教育と社会教育での利用にかかわらず、また、NHK for School (<http://www.nhk.or.jp/school/>) を覗くまでもなく、NHK教育テレビ番組は、学習内容に特化した映像を中核的な素材に、学習指導要領と地域や社会が求める独自のカリキュラムを作り編成し放映する。学校でいえば、校長先生の責任のもと学習指導要領に基づくカリキュラムを作り教職員一丸となって実施し評価することと同じ。

「テレビは太陽であった」という「山の分校の記録」の象徴的なワンカットがある。アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントが指摘される中、放送教育の理論と実践の基礎と基本。まだまだ輝きを失っていない、失わせてはならない。

きょうよう と きょういく のままだに

⑥

東京学芸大学名誉教授 篠原 文陽児